

「二人三脚でやってきた石川さんと喜びを分かち合いたい」とあいさつする藤谷さん（大阪市内で）

詩とことば

阿部 公彦

* 3月

受験シーズンも峠を越えた。試験は、受験生も出題者も「表現」の機会。かつて某大学の数学でこんな問題が出た。「正八面体のひとつの面を下にして水平な台の上に置く。この八面体を真上から見た図(平面図)を書け」。シンプルなのに「あれ?」と思う。しかも「台」「真上から」には微妙な生活臭。洒落てる。問いたるもの、こうありたい。そういえば「ある人が、くだもの屋さんで20円のリンゴを7こ買おうとしたら、10円たりませんでした。」という問題に、「ある人」は貧乏なのか?と心配したのは小学生の岸本佐知子だった(『気になる部分』白水社)。算数、おそろべし。詩人も問いを野に放つのが得意だ。とりわけ連詩でも知られる詩誌「権」のグループ。谷川俊太郎、茨木のり子、吉野弘、川崎洋、大岡信:彼らは平易な問いかけ・語りかけにより詩を解放した。今でも教科書で作品が人気なのは、子供たちも問いが大好きだからだ。その谷川が編者として活躍している。『自選 谷川

心つかむ平易な問いかけ

俊太郎詩集』、『茨木のり子詩集』につづき『辻征夫詩集』(いずれも岩波文庫)。「ポートを漕ぐおばさんの肖像」は不思議な「おばさん」への問いが印象的。ペテラン詩人では高橋睦郎も元氣だ。近年、『和音羅説』(幻戯書房)など博識に啓蒙性を備えた評論が注目されたが、『続続・高橋睦郎詩集』(思潮社)は本業の集成。永遠まで「がお薦め。詩壇の話題は中原中也賞に続き日氏賞も受賞した岡本啓『グラフィティ』(思潮社)か。難解とされる現代詩だが、この詩集はさらっと軽く眩しく、まるで米詩人フランク・オハラのように揺れながら歩く。軽さに戸惑う向きは「腐葉土」、『発声練習』あたりからどうぞ。対照的に熱気がたぎるのは、高良勉の沖繩詩論「言振り」(未來社)。川満信一らの引用詩が強烈だ。松井啓子『くだものにおいのする日』(ゆめある舎)は三十四年ぶりの新装復刻。とぼけたように、静かな饒舌が微妙に神経をつく。岡野弘彦、三浦雅士、長谷川權『歌仙 一滴の宇宙』(思潮社)は連句集。ことばを差し出し、受ける過程は一種の問答となるが、それでも各句が屹立する。三浦の「跋」は必読だ。(東大准教授)

食べる喜びに満ちた、健やかな暮らしへ。

元気の源となる“食”に力を入れながら。私たちは、おむつゼロ、特殊浴ゼロ、経管食ゼロ、車椅子ゼロの「4大ゼロ」に取り組んでいます。



バランスのとれた食事で、充実した毎日を。
(梅原芳彦様)

介護

○要支援1から要
有料老人ホーム(一
ナ
リスト*
24時間の看護と
生涯にわたる安